

- 1 派遣期日 平成29年11月23日（木）
- 2 研修先 学校名（会場名）茨城大学教育学部附属中学校
所在地 水戸市文京1丁目3番32号
<http://www.jsch.ibaraki.ac.jp>

3 研修内容

研修校研究主題

21世紀を生きるための「教養」を高める学びの創造（4年次）

（1）茨城大学附属中学校の研究の概要について

この研究は、自己の生き方の基盤となるものを、「21世紀を生きるための教養」ととらえ、それを高める学びの創造を通して、自己を確立する生徒の育成を目指したものである。教養を高める手立てとして、学ぶ意欲を喚起する課題の設定や見通しを持つガイダンスの導入、自己の学びを支える協同の学びなどを取り入れ研究を進めていた。協同の学びを支える手立てとして「ERD活動」というものがある。

「ERD活動」とは「Encounter Recognition Development」の頭文字をとったものであり、それぞれ「グループの中での友との出会い」「友についての再認識」「人間関係の広がりと深まり」を意味したものである。「ERD活動」のねらいとして次の4つを設定している。

- ①他の人との関係づくりを通して自分自身を見つめ、人としての生き方を考える
- ②人と人とのよりよい関係を築いていくための基本的なスキルを体系的に学ぶ
- ③自分や他者の存在を大切にす る心を育成し、よりよい人間関係を築こうとする態度を養う
- ④自分を開き、他を受け入れようとする態度を養う

このような「ERD活動」を学年や時期、学級の実態に合わせて実施することで、学び合う基盤として聴き合う関係づくりを進めてきたということであった。他にも教養を高める手立てとして、「問い、考え、表現する」ことを重要と考え、授業づくりを進めていた。

「問い」は、既存の知識や経験のずれから生み出され、「問い」を解決しようと自らの意思で対象にはたらきかけることで学びは主体的なものとなる。このことを基本の考えとして捉え、授業では、「問い」が生まれる課題を設定することが大切であるとしている。

「考える」とは、「問い」の解決を目指し、様々な知識や体験をつなぎ合わせながら分析、解釈、検討、吟味、創造することであり、授業では、他者とお互いに考えを表現し合う場面を設定し、自分たちなりの新しい価値を創り出していくことと捉えている。

また、「表現する」ことで、新しい問いが生まれ、解決を目指して新たな知識を集め、それをもとに表現し合いながら課題解決を目指す。

具体的には次の図の過程を取り入れて授業づくりを行っている。この探求の過程のモデルを使い、課題解決のために、どのようにしたら解決できるか方法を考え、見通し・計画を立

て、実際に計画を実行するという体験を重ねるというものである。また、結果について考察し、これまでの成果を吟味し、うまくいかなかった部分を修正することで課題を解決し、また新たな課題の解決を目指す。これらをスパイラルで行うこと、活動の中で協同的に他者とかわり合いながら学ぶことを通して、「教養」を高め、自己の生き方の基軸となるものをつくるという研究である。

探求の過程のモデル

課題→解決への見通し→活動（体験）→考察・吟味→評価→修正→新たな課題

（２）授業参観について

授業参観を通して、今後の数学教育の方向性を見い出すことができた。

まず１点目は、課題設定についてである。参観した授業の課題は、「東日本大震災の余震活動は、落ち着いてきたと判断してよいだろうか」というものであった。記憶にも新しい東日本大震災をテーマにするだけでなく、現在の自分たちの生活にもどのような影響があるかを考えさせることで、生徒が興味や解決したいという意欲をもって授業に取り組むことができていた。生徒の興味や意欲を引き出すためにも、身近なことや自分たちの生活に関することをテーマに課題を設定することの大切さを改めて実感することができた。

２点目は、既習事項の活用である。今回の授業では、課題を解決するために、気象庁が実際に出している余震活動に関する箱ひげ図を提示していた。授業で扱った箱ひげ図が、実際に生活の中で活用されていることを知ることができ、生徒たちは数学のよさを感じることができていた。また、箱ひげ図から分かることを読み取らせたり、理由を説明する際に、中央値や範囲などに着目させたりしていた。このような取り組みから、生徒たちは既習事項の復習をすることができていた。授業の中で、既習事項を振り返り活用させる取り組みを行うことで、既習事項の復習にもつながり、さらに生徒が数学を学ぶことのよさを実感することができると感じた。

３点目として、学びを深めるための取り組みである。あえて不十分な資料を生徒に提示し、生徒にそれを気づかせ、その発言をもとに新たな資料を提示していた。また、判断の根拠を明らかにさせ、他者に説明する場面を多く設けていた。生徒たちの発言や考えをつなぎ、授業を進めていく様子が見られ、生徒が主体となった授業が行われていると感じた。また、判断の根拠を大切にすることで、数学的な見方や考え方がしっかりと培われていると感じた。

４ 感想

授業参観を通して考えたことは、自分の授業との比較である。自分が今、展開している授業は、どちらかというと教科書中心で課題が設定され、さらに教師主導型の授業が多い。本校の生徒は基礎・基本の力は身につけている生徒が多い。しかし、課題として、授業に対して受動的な態度になってしまっていることや数学的な表現力が身につけていない。このようなことから、今回の研修で学んだ導入や展開の工夫を、自身の授業や本校の教育活動に生かしていきたい。また、今回参観した授業では、新しい学習指導要領で扱われる箱ひげ図を使った授業が行われていた。学習指導要領の改正にも、校内で研修を重ね、しっかりと準備していかなければいけないと改めて感じることもできた。